Title	柳田国男とジェントルマン資本主義
Author	佐藤, 光
Citation	経済学雑誌. 別冊. 106 巻 2 号
Issue Date	2005-10
ISSN	0451-6281
Type	Learning Material
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

応用科目・社会経済論 （講義資料）

柳田国男とジェントルマン資本主義

佐　藤　　光

教科書『柳田国男の政治経済学』（30頁，67-9頁など）で指摘したように，柳田国男の理想の日本社会像には，貴族にひきいられた，18世紀～20世紀始めのイギリス社会と通ずる面がある。この講義資料では，当時のイギリス社会をもう少し説明して，教科書の補足としよう。

市民革命にも産業革命にも反対した資本家たち

この場合まず肝心なことは，近代社会とは，王侯，貴族，聖職者などの支配体制（アンシャンレジーム）を打倒したフランス革命のような市民革命と，農耕社会を新技術の力によって革新した産業革命という二つの革命を経た社会だ，近代イギリス社会も例外ではない，といった通念から解放されることである。読者の多くは，中学校以来，近代史をそのように教えられてきたと思うが，それは必ずしも正しくない。

息の長い歴史学界では「最近の業績」といえるP. J. ケインとA. G. ホプキンスの『ジェントルマン資本主義の帝国』（原題，British Imperialism，原書出版年，1993年）によれば，産業革命の母国であり，かつフランスと並ぶ市民革命の母国とされてきたイギリス（正確にはグレート・ブリテン）の近代化を主導し，それを「イギリス帝国」にまで発展させたのは，通説とは逆に，市民革命にも産業革命にも反対した保守的な土地貴族，ジェントルマンたち（gentlemen）だった。

ジェントルマンあるいは紳士は，イギリスに伝統的な貴族の一種である。ただし，ラスレット『われら失いし世界』によると，「貴族」とはいっても，最下層のいくつかの階層に属するあまり地位の高くない貴族だったらしい（表1参照）。

ジェントルマンの多くは，イングランド南部の田舎に広大な領地を所有し，屋敷を構え，多くの召使や労働者を雇う農場主だった。彼らが貴族の一員として「高貴な義務」「ノーブレス・オブリージェ」を果たすことを要求されたのは当然だが（教科書，67-9頁，参照），さらに面白いのは，彼らが，「産業」や「勤労所得」や「利潤追求行為」を嫌い軽蔑し，土地所有による地代という「不労所得（ランチェ，rentier）」や「閑暇」をこの上なく尊重したという点である。

「利潤追求行為」はともかく「勤労所得」や「産業」を軽蔑し，「不労所得」や「閑暇」を尊重するというのは，「無駄飯喰い」などどいわれるとよい気はしない，我々近代人には抵抗のあるところだが，少なくとも西欧の伝統のなかでは，古代ギリシア以来，貴族にとっての当然の「徳目」とされてきた。それはむしろ「高貴な義務（ノーブレス・オブリー－ジェ）」の一部だったといってもよいだろう。

なぜなら，「産業」，すなわち日々の生活の糧を得るために働くことは，「高貴な事柄」，たとえば天下国家という「公事」ために献身することの妨げとなると，考えられていたからである。これは，物理的時間配分という点からも明らか

表1　ステュアート朝期（17世紀頃）イギリスのステイタス表

		階層	称号	呼びかけ	身分名	職業名
ジェントリ 大貴族（ノビリタス・マヨール）〔貴族・レディ〕	1	公爵 大主教	ロード（卿）レイディ	ザ・ライト・オナラブル ジ・オナラブル ザ・ロード ザ・レディ マイ・ロード マイ・レディ ユア・グレイス ユア・ロードシップ ユア・レディシップ など	貴族（ノーブルマン）	なし
	2	侯爵				
	3	伯爵				
	4	子爵				
	5	男爵 主教				〔専門職〕
小貴族（ノビリタス・ミノール）〔ジェントルマン〕	6	準男爵	サー	ザ・ワーツップフル ユア・ワーシップ など	ジェントルマン	陸軍将校 医師 法律博士 貿易商 など
	7	ナイト	デイム			
	8	エスクワイア	ミスター			
	9	(たんなる)ジェントルマン	ミセス			
		聖職者	〔サー〕		〔ユア・レヴェレンス〕	
	10	ヨーマン	グッドマン グッドワイフ (グッディ)	ワージー	ヨーマン	ハズバンドマン
	11	ハズバンドマン				
	12	クラフツマン トレイズマン 職人	なし	姓名のみ	なし	職種名 (大工など)
	13	レイバラー				レイバラー
	14	コテイジャー 被救済民				なし

出所：ラスレット『われら失いし世界』邦訳，50頁（少し変えてある）。

だといえるかもしれない。残業，残業に明け暮れている者に，日本外交のことをきちんと考える「閑暇」はない。

だから当然，ジェントルマンたちは産業革命に反対した。もっと正確にいえば，蒸気機関や力職機などの産業革命の成果を活用した綿業会社を設立し，利潤を稼ぎ，のし上がってきたマンチェスターなどの新興産業資本家たちと，彼らは経済的，政治的に対立した。対立の根底には，西欧の貴族的伝統と新興成金との文化的対立があったのである。

しかし，貴族といえども喰わなければならない。いや「喰う」ことはなんとかなるが，人を動かし，政治を行ない，イギリス帝国を建設して発展させるためには，やはりどうしても「金」がいる。しかし，「貴族」の面子，伝統を維持しながら「上品に金を稼ぐ」，「ランチェ」を獲得しつづけるにはどうしたらよいのか。

19世紀以降のジェントルマンにとっての難問は，かつての土地所有による地代という「ランチェ」の道が，農業の相対的な衰退を反映して次第に頼りなくなってきたことである。あるいは，中部および北部イングランドやスコットランドの都市で，工場の煙突から煙をもくもく吐き出しながら綿製品を世界中に売りまくる産業資本家の財力に対抗するだけの収入が，次第に

期待できなくなってきたことである。

そこで見出されたのが，ロンドンのシティをセンターとした世界金融と世界商業による新たな「ランチェ」獲得の道だった。というのは，金融と商業，特に前者は，銀行に預けた定期預金を思い浮かべればすぐに分かるように，まったく労せずして所得が入ってくるという意味で，地代にきわめて似た側面を持つからである。商業も，物を右から左に移すだけで利益を得ることができるという意味で，工業所得よりははるかに地代に近いといえるだろう。そして，その商業と金融業が，産業資本家が額に汗して築いた「世界の工場」の物流と金融のネットワークを牛耳るグローバル資本主義を構成するものだとすれば，そこから得られる「ランチェ」は，かつての土地貴族の「ランチェ」にも比肩しうる巨額なものとなる（このあたりのことは，拙著『21世紀に保守的であるということ』補論3にもう少し詳しく書いてある）。

実際，イギリス帝国の経済的屋台骨は，19世紀半ばから20世紀初頭にかけて，ますます「産業」（より正確には「工業」）の成果を示す「貿易収支」ではなく，商業や海運を中心とする「サーヴィス収支」と「海外投資収入」によって支えられることになるのである（表2参照）。

表2　貿易外取引と国際収支：イギリス，1851-1913年

	1851-75	1876-1900	1901-13
貿易収支	−51	−120	−153
ビジネスサーヴィス	+24	+35	+49
海運	+35	+58	+87
サーヴィス収支	+59	+93	+136
海外投資収入	+26	+80	+151
国際収支	+34	+53	+134

資料：Imlah, Economic *Elements in the Pax Britannica* など。
出所：ケイン／ホプキンス『ジェントルマン資本主義の帝国』（Ⅰ）邦訳，117頁（少し変えてある）。

グローバル・カジノ資本主義とバーク，そして柳田

グローバル資本主義の担い手となったジェントルマン資本家を，バークがもし20世紀まで生きていたらどう評価しただろうか。これはむずかしい問題だが，「農業」や「土地」にこだわり続けた彼が肯定的に評価することはなかったであろう。もちろん「ランチェ」が「高貴な義務」となるという意味では，貴族的伝統の継承を意図したバークが，それにある種の意味を認めることはありうるが，資本の国際的投機を主体としたグローバル・カジノ資本主義に堕落してしまった今日のグローバル資本主義を賛美することはありえない（グローバル・カジノ資本主義の詳細については拙著『バブル以後のバブル時代』第1章参照）。強い嫌悪の情さえ示すかもしれない。地球規模でのマネー・ゲームにはなんの「高貴さ」も感じられないからである。

これは，柳田にしても同じことだろう。バークが尊敬した西欧の貴族的伝統すなわち騎士道は日本における武士道に近いが，今日の日本資本主義から武士道の余韻を感じとることはできない。だが，これらの点については別の機会にゆっくり話すことにしよう。

参考文献

上で言及しなかったヴェブレンの本も挙げておく。「有閑階級（leisure class）」に関する不朽の名作である。

佐藤　光『柳田国男の政治経済学』世界思想社，2004年。

———『21世紀に保守的であるということ』ミネルヴァ書房，2000年。

———『バブル以後のバブル時代』秀明出版社，1998年。

ケイン．P. J／A. G. ホプキンス『ジェントルマン資本主義の帝国』（Ⅰ）竹内幸雄／秋田茂訳，（Ⅱ）木畑洋一・旦祐介訳，名古屋大学出版会，1997年。

ラスレット．P『われら失いし世界』川北稔／指昭博／山本正訳，三嶺書房，1986年（原書，1983）。

ヴェブレン．Th.『有閑階級の理論』高哲男訳，ちくま学芸文庫，1998年（原書，1899）。